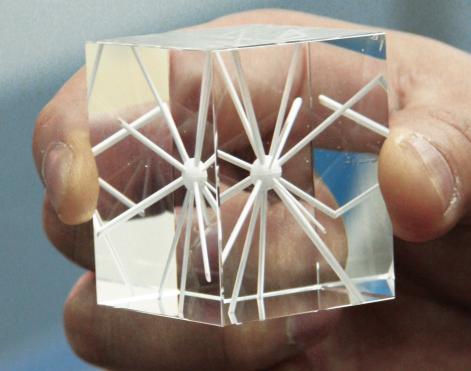
# 荒波を乗り越えられるか ~モノづくりの原点回帰へ~

株式会社ジャパンセル 町田市小山ヶ丘



「いま新しい風を入れなければ」―。 若き経営者の顔には、切迫感が溢れていた。

# 光学ガラス加工のエキスパート

東京都町田市の小高い丘陵。将来性のある技術を持った企業が 集まる工業団地「まちだテクノパーク」の一角に、ジャパンセル はある。従業員数は 40 名。光学ガラス加工を扱う同社は、規模 は小さいながらも、顧客の依頼を受けてオーダーメード製品を作 る「少量多品種型」の経営で、1982 年の創業以来 、着実に技術 を磨き重ねてきた。独自の光学ガラスの接合・製造方法は、米国・ 日本・ドイツ・韓国で特許を取得している。



09年の7月には、深澤篤氏 (34歳)が創業者である父から 社長を引き継いだ。「会社始まっ て以来、いまが一番きつい」。 深澤社長は率直に心境を吐露す る。経済危機の荒波の中で、事 業継承した中小企業の社長の舵 取りを追った。

### 技能伝承一プロ意識を育てるために

「ギリギリ間に合いました」一。同社の塚本和幸海外営業部長 (54歳) はほっとした表情で言う。扱う光学ガラスの精密加工は、大企業が乗り出しにくい狭い市場の高度な技術。ガラスの曲げに必要なガス加工の技術を持った社員が退職することになり、後任者の育成がタッチの差で間に合ったのだ。

深澤社長をはじめ、従業員の平均年齢は30代前半と若い。その中で会社を存続させていくには、マニュアル化できない技能をいかに伝承していくかがカギとなる。団塊の世代の退職を迎えたどの企業でも直面する課題だ。

技能伝承について深澤社長は言った。「会社で技術を教えるのは、仕事を一通りこなせるようになるまでの5年。あとは自分で考えさせる。それが『成長』に繋がるからね」。

同社はピラミッド型の組織にはなっていない。その分、若い人 の活躍の場が多い。社員が新しいことに挑戦し、それぞれの分野 や技術でプロ意識を持った集団になることを目指しているという。

## 経済危機 ―「カイゼン」のきっかけ

同社の製品は特注品であるがゆえに、顧客に対する「製品を作ってあげる」という驕りが、かつて技術者の 一部から垣間見えることがあった。

2008年。そこに経済危機の波が襲いかかった。「潮が引くかのようにみるみる仕事がなくなった」。価格が高く一品ものが多い同社では、少しの受注減が大きな打撃になる。「経済危機を受けて、『作ってあげる』から『作らせていただく』に変わった」「社内の『カイゼン』を促進させる良いきっかけになった」と深澤社長は振り返る。

これを機に新しいことを次々と導入した。事業開拓 のための増資や外部からのコンサルティング導入、海外 展示会への参加……。会社は今、変革期を迎えている。

# 「逃げない」 一顧客と実直に 向き合う会社へ

同社は既存の考えにとらわれない新たな取り組みに 着手することで、技能伝承・経済危機といった厳しい 状況を打開しようとしている。

「レーザーモジュール」というレーザーを発する機械 のガラスを中国から輸入し、日本市場で広めようとし ているのだ。ガラスの市場を選んだのは、今までの分 野から逸脱しないためだった。

レーザーを「受ける」側のガラスを加工してきた同 社が、「発する」側に目を向けた画期的な発想の転換 だった。レーザーシステムを一体的に担うことは、「強 み」になりうる。

深澤社長は言う。「現状維持で耐え忍んでいるだけではダメ」。中小企業が生き残るためには、市場の変化についていける柔軟さが必要だという。レーザーモジュールの輸入販売を通じて新しい知識を取り入れ、活動の場を広げていく狙いがある。

「顧客のニーズに誠意をもって応え続ける」。

深澤社長が何度も口にした言葉だ。原則、仕事を断らない。難しいガラス加工でも、クライアントに「できない」とすぐに言うのではなく、「この仕様でいかがですか」と逆提案する。クライアントのニーズに応えられる製品を形にするためだ。もしも同社で不可能ならば、他社を紹介することまであるという。

モノづくりの原点は使用者の視点に立つことだ。だから顧客と実直に向き合う。「うちのウリは『逃げない』 こと」一。深澤社長の決意をもとに、同社はモノづくりを続けていく。(担当 大久保貴裕 山田美樹)



### オプティカル・コンタクト

ジャパンセルは「オプティカル・コンタクト」と呼ばれる、接着剤を使わずにガラス同士を接合させる技術をコアとしている。

この技術は、接着剤と似た仕組みを用いている。 物質は分子同士が分子間力によりくっついて形成 されている。接着剤は互いの物質の細かな隙間に 入り込み、分子間力を働かせて物質を接着する。 オプティカル・コンタクトは接合表面を完全に凹 凸のない面に研磨する。互いの隙間を無くすこと で、分子間力によりガラス同士を一体化させられ るのだ。少しでも凹凸があると十分には接合され ないため、精度の問われる技術と言える。

この技術を用いて接合したガラスは接着剤を一切使っていないので接合面には不純物がない。これにより、接合面を光が透過する際、光が別方向に反射や拡散することはない。そのため、主にオプティカル・コンタクトは、正確さが要求されるレーザー光の分析装置や露光装置に使われている。

見えないところで私たちの生活を支えている基盤技術の一つと言えるだろう。(担当 西大助)

### 企業からのメッセージ

「誠意のある行動が仲間を作り、その仲間の支えが新 しい一歩を踏み出す勇気に変わる。一人で出来ること には限りがあるが、仲間と共に行動すれば、無限のチャ ンスが待っている」。

(株式会社ジャパンセル 深澤篤)

#### 株式会社ジャパンセル

所在地 町田市小山ヶ丘二丁目 2 - 5 - 1 1

まちだテクノパーク

代表者 深澤 篤

資本金

3,500万円 創業 1982年

従業員数 40名 事業内容 精密光学ガラス加工

精密光学ガラス部品の製造および販売

電話(代表) 042 (798) 4621 ホームページ http://www.jpcell.co.jp/